

第34回平和祈念コンサート 講演会

【綿平 敬三氏】

皆さん、こんばんは。私は被爆者練馬の会に所属して頑張っている綿平 敬三です。簡単に自己紹介させていただきます。

1歳8カ月のときに、広島で被爆しました。父を直爆で亡くし、弟も3歳で亡くなりました。生き残ったのは、私と母だけでした。放射線の内部被爆により、運動機能障害や甲状腺機能低下症が発病しています。健常者としての生活は出来ません。

そんな私ですが、被爆者の一人として、生きている限り、動ける限り、平和な世界の実現に向けて戦って行こうと決意し、今日を迎えています。短い時間ではありますが、本日はみなさんどうぞよろしくお願いいたします。

写真は広島市平和公園にある通称「原爆ドーム」です。1945年8月6日、広島に落とされた原爆によって、この年の年末までに14万人の人びとが殺されました。

広島・長崎で投下された年、1945年末までに2発の原爆によって殺された人は21万人と言われます。東京駅から熱海駅の距離は、104.6キロメートルです。線路の上を、21万人が肩をふれあうように横に並ぶと、ほぼその長さになります。

21万人の多くは、黒焦げになるほどの熱に焼かれ、建物の下敷きになって生きながら焼かれ、体にウジがわき、あるいは髪の毛が抜け、高い熱を出し、血の混じった下痢をしながら、亡くなっていったのです。名前すら記録されなかった人びともたくさんいました。

原爆が投下されたとき、私は1歳8カ月でした。私の母のお腹には弟がいました。「中国地方で一番大きい広島市も危ない」といわれ、私は母に連れられて中国山地の三次市にあった母の実家に疎開していました。

私の父は、広島市西引御堂町で「わた喜」という仕出し料理店を営んでいました。8月5日、近所の人が亡くなり大きな法事になるので、母に戻るよう連絡があり、母は私を連れて6日の朝8時頃に広島駅に着きました。

その時、原爆が落とされました。広島駅は、爆心地から2キロメートルという至近距離にあります。爆心地から2キロメートルというと、JR 東京駅から秋葉原駅くらいの場所になります。当時1歳だった私には、原爆が落とされた直後の広島駅のことはわかりません。

昭和46年1971年8月6日に、広島市が『広島原爆戦災誌』を発行しました。この『戦災誌』に、広島駅で原爆の状況や被爆した人の証言が載っています。

瀬戸高行さんの証言の一部を紹介します。瀬戸さんは、広島駅構内で、客車の入れ替え作業に従事していました。瀬戸さんは、客車の入換作業をおこなっていたそうです。

ピカッと光って、ドッカンという音と同時に、あたり一面真っ暗で何も見えません。瀬戸さんは、機関車の先頭から約30メートル吹き飛ばされていました。瀬戸さんの着ていた鉄道の制服は、真っ黄色になりボロボロ、足に巻いていた脚半(きゃはん)も、ボロボロになって焼け溶けていたそうです。

顔をなでるとズルッと皮がむけてタレ下がり、頭は帽子が吹き飛び、帽子のあとだけが残って、オカっぱ頭のように髪の毛は焼けちぢれていました。瀬戸さんと同じ作業をしていた人は、走っていた機関車にお腹を真っ二つにれき断され、即死したと聞いています。

こんな状態のなかで、母も私も、ヤケドも大きなケガもしていなかったのは奇跡的だったと思います。母はそんな中を大きなお腹を抱えて、私を連れて逃げ惑い、「芸備線」の線路を歩いて三次に向かいました。母は、どうにか途中から列車に乗せてもらい、三次駅に向かい、私が実家にたどり着いたのは夜中になっていたそうです。

私の家と店があった西引御堂町は、爆心地から 800 メートルという至近距離にありました。料理店を営むとともに、板前だった父は私に会うのを楽しみにしながら、法事の料理の準備を始めていたのだと思います。

『広島原爆戦災誌』には、西引御堂町のすべての建物は一瞬にして潰され、たちまち激しい火の手が上がり、81 パーセントの人が亡くなったと書いてあります。「ほとんどの人は、建物の下敷きになって生きたまま焼かれた。かろうじて、天満川の川岸に逃げようとした人も、その途中で力つきて死んだ。」とも書いてあります。

父の最期はどんなだったのでしょうか。私はこのような記録と被爆者が描いた絵でしか、父の被害も当時のことを知る術がありません。

これは、広島市平和公園内にある原爆死没者の遺骨を納めた供養塔です。父の遺骨は、この中に納められているのでしょうか。きっと父は、母や私の名を呼びながら、家族のことを心配しながら、亡くなったのだと思います。

私が 5 歳になった夏の朝です。被爆から 3 年が過ぎた 1948 年 8 月 20 日でした。弟が縁側で苦しそうに喘いでいました。母は朝早くから、牛の餌にする草を刈りに山に入っていました。私は一人で弟を見ていました。「お兄ちゃん、お水がほ

しい。」と弟が言います。水をあげると、弟の様子がみるみる変わっていきました。5歳でしたが、私はその時のことを覚えています。

医者と呼ばれたようですが、弟はそのまま息を引き取りました。まだ3歳前でした。医者は弟の口と鼻、耳に綿を詰めて「この病気はうつるから」とそのまま火葬するように言ったようです。弟は2時間後には骨になって、実家の墓場に墓石もなく埋められたと聞きました。

これが、私が母と弟と暮らしたすべてです。

弟が亡くなると、母は三次市内に住み込みで働きました。私が母と暮らしたのは5歳まででした。

私は祖父の家に預けられ、小学校に通わせてもらいましたが、母の仕送りがあるにもかかわらず、お昼の弁当を持たせてもらえず、昼休みには山に行って食べられそうなものを採って食べるような毎日でした。電気もない部屋で生活し、冬の寒さや虫に刺され続けた夏の寝苦しさは、今でも覚えています。

私が中学生の頃に、母は広島に出て働き、その後は東京に出て、父の兄の紹介で銀座の割烹店で働きました。私は母の仕送りで、広島で中学校と高校に通うことができました。それでも、中学時代は母の親戚の家に下宿し、高校時代は食事付きの下宿で、下宿の手伝いをしながら貧しい生活を続けました。

私の暮らしが安定したのは、高校を出て就職してからでした。母は、父の兄夫婦の世話になってきたことに義理立てして、その後も私とは一緒に暮らそうとはしませんでした。させてしまったという負い目もあったと思います。

私は今となつては、父の顔も弟の顔も思い出すことができません。母の写真もありません。私の家族は、広島の劫火(ごうか)の中で、すべて失われてしまったのです。

そんな母が被爆者健康手帳を申請したのは、1967 年、救急車で運ばれたときだったそうです。このとき、都立駒込病院の医師から、被爆者手帳を申請するようにすすめられて、はじめて被爆者の制度を知ったそうです。

被爆から 65 年が過ぎた 2010 年 8 月 6 日、老衰のために母は亡くなりました。そんな母から勧められて、私が被爆者健康手帳を申請したのは、母が亡くなる 18 年前でした。母は東京に出てきてから、落ち着いた人生を送っていたようです。しかし、私は 25 歳の時に夫を亡くした母が、90 歳で亡くなるまでの 65 年間の人生を知りません。

母は亡くなる 5 年前、85 歳のとき、1 通の手紙を私に残してくれました。その一部を紹介します。

「敬三、お母さん 思い出して手紙を書いているの。頭も悪くなった。手も不自由でごめんなさい。敬三にも苦労させました。昇三も産まれました。二歳で急に亡くなりました。被爆の為に苦労が続く。涙が出て書けない。ここまでよく生きて来ました。今は周りの人が良くして下さるので、安心して横になっております。幸せ者です。お父さんが守ってくれます。毎日仏壇に祈っています。七月二十三日、小遣いあげる。母より、取りに来なさい。」

私と母をつなぐたったひとつの物、それがこの手紙です。私は当時 60 歳でした。それでも「小遣いあげる」とは…。

父を、母を、弟を返してほしいと、家族とのおだやかな生活を返してほしいと、どんなに願ってもそれは無理なことです。

ですから、私は黙祷する時、父と母、弟の冥福とともに、私たちのような家族をつくらせないために、決してこのような被害を繰り返させないために、核兵器のない世界の実現を願います。

2024 年 12 月、ノーベル平和賞が、原爆被爆者と日本被団協に与えられました。私たち被爆者の活動が世界に認められました。ヒロシマ・ナガサキの原子野から生き残り、決して、再びヒバクシャをつくってはならないと訴えてきた私たちの運動が、世界に認められたのです。

しかし、あの栄えある受賞は、被爆者だけが受けたものではありません。唯一の戦争被爆国で、ご一緒に暮らすみなさんに支えられてきたからこそだと、私は思います。あのノーベル平和賞は、被爆者を支えたすべての人びとに与えられたものです。

最後に、私たち東京の原爆被爆者のスローガンを紹介して私の話を終わります。

「われら 生命もて ここに証す 原爆許すまじ」

ありがとうございました。